

【氏名】神本 秀爾

【所属】(助成決定時)

京都大学大学院 人間・環境学研究科

【研究題目】

ジャマイカにおける宗教と人の多層的な関係

ーラスタファリ運動の動態に関する文化人類学的調査ー

【研究の目的】

本研究の目的は、ラスタファリ運動の宗教／思想であるラスタファリアニズムと人々の日常生活における多層的な関係について考察し、運動が継続／更新される姿を分析することである。具体的には、①複数のラスタファリ集団間の協調・対立関係 ②ラスタと非ラスタの関係 ③開かれた宗教的資源としてのラスタファリアニズムと個人との関係、に関する一次資料を分析の対象とする。また、文献研究では、ラスタファリ運動研究を、一般的な問題群と接続するための視座の獲得を目指す。本研究は、キングストンにおけるラスタファリ運動の展開に関する包括的な民族誌的記述であり、この記述をもとに、信者が宗教を「資源」として利用しながら／一方では拘束されながら、運動全体を継続・更新させていくダイナミクスを解明する。

【研究の内容・方法】

本研究は、現地調査および文献調査から得られた資料に基づいている。文献調査の対象は、ラスタファリ運動に関する更なる資料の収集だけでなく、宗教人類学・政治人類学・モダニティに関する文献等である。文献調査では、先行研究における、ラスタ(ラスタファリアニズムの信者・信奉者)の当事者性に関する視座が不足していることが明らかになった。この事実は、インタビュー、参与観察からなる現地調査を実施するうえでの重要な指針となった。それは、ラスタを「近代性の浸透への非合理的反応」と捉えるのでも、「自律的個人の集合体」と捉えるのでもなく、教義や仲間との権力関係等に拘束されながらも、自分の生き方を摸索する個人として捉えることの重要性を示唆している。現地調査は、主に以下の3つのテーマを中心に行った。

①複数のラスタ集団の関係を分析する

本調査では、修士課程で調査対象としていた宗派集団である、エチオピア・アフリカ黒人国際会議派ラスタファリアンに加え、ナイヤビンギ・オーダー、スクール・オブ・ヴィジョンにも調査の手を広げた。信者たちの各宗派へのコミットメントの度合い等について聞き取り調査を行った。

②ラスタと非ラスタとの関係を分析する

本調査では、宗派集団のコミュニケーションやチャーチと周辺住民の関係に主な焦点を当てた。

③ラスタファリアニズムという「資源」と個人との関係を分析する

本調査では、主にレゲエ・ミュージシャンやクラフト製作者を主な調査対象とした。エチオピア・ア

フリカ国際会議派は、レゲエ・シーンとの関係の深さが先行研究でも度々言及されている。本調査では、同宗派に所属する信者を中心に、彼らの主張や、彼らに関する語りなどを収集し分析の対象とした。クラフト製作もラスタの主な生業のひとつとなっているが、この場合も「宗教的正しさ」という価値判断が下されていた。

#### 【結論・考察】

文献研究からは、ラスタファリ運動研究における当事者性への視点の不足が明らかにされた。そのことを念頭に上記①②③の現地調査で収集した資料を分析した。①からは、多くの信者が集団に対して「非排他的なコミットメント」を行っているということが明らかになり、宗派集団というものの敷居の低さが明らかになった。②の研究からは、宗教の違いというよりも、同じエリアの住人として、協力する姿勢の強さが明らかになった。③の研究からは、様々な宗派集団の要素を比較的自由的な解釈のもとで受容し、実践している姿が明らかになった。それは、「非排他的なコミットメント」とも相まって、宗教的権威の源泉の不確かさを明らかにするものでもあった。以上の調査から、ラスタファリ運動内部では宗派集団の権威に従属するというよりも、無意識的に行われる教義の再解釈や、解釈をずらしていく実践自体が運動の動態の核心であるとの結論を得た。